

展覧会

「記録された日本美術史——相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」

美術工芸資料館 館長 並木誠士

美術工芸資料館では、2018年6月25日から8月11日まで、「記録された日本美術史―相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」を開催します。この展覧会は、明治から昭和時代にかけて、日本美術史研究の基礎を築いた三人の研究者の調査ノートを展示する企画です。京都工芸繊維大学では、本学名誉教授土居次義先生の調査ノートおよび写真類、蔵書を御遺族から2009年に寄贈していただきました。土居先生は、「モレリ法」と呼ばれる西洋美術研究の手法を日本美術史にも用いて、体系的な日本美術史研究への道を開きました。モレリ法とは、絵画表現のなかの比較的重要でない細部の表現に画家の癖があらわれるとする鑑定法です。このモレリ法を活用した土居先生の研究成果としては、桃山時代の画家である狩野山楽と狩野山雪の詳細な作品分析にもついで、京都の寺院襖絵の筆者確定があります。不正確な寺伝の修正にはさまざまな軋轢もあつたようですが、土居先生の継続的な研究により、京都の襖絵にはじめて客観的な光があつたと言えます。土居先生の調査ノートは、2013年に京都国立博物館で開催された特別展「狩野山楽・山雪」展に出品されて、多くの研究者に注目されました。その後も、ノートに記された情報をもとにして、いくつかの知見が明らかになっています。

2015年には、大阪大学の文化庁助成事業と連携して「土居次義記憶と絵画展」を開催しました。この展示は、急遽決まったために正月明けの5日間しか会期をとることができず、研究者を中心に、見たかったけど見に行けなかったという声を多く聞きました。また、同様の調査ノートの調査も徐々に進んでいきましたので、三人の先生の調査ノートを同時に展示する展示ができないかと考えるようになりました。さらに、今回は東京でも展示をしたいと思います。実践女子大学の仲町啓子先生にご相談して、実践女子大学香雪記念資料館でも開催ができることになりました。調査研究のために出光財団から助成金をいただき、それにより調査を進めることができました。

展覧会の紹介を兼ねて、三人のプロフィールを紹介したいと思います。

相見香雨(1874-1970)は、島根県松江市出身、本名繁。新聞編集者を経て1908年より、美術図書出版で知られる審美書院に勤務して美術書編集に従事します。在野の立場で優れた実証的研究を続け、78歳で文化財保護委員に就任します。今回、一部を展示することができた「相見香雨自筆調査録」(九州大学文学部図書館)は、相見香雨が35歳から92歳まで書き継いだ調査記録および日記で、1984年、九州大学文学部へ残存の旧蔵書とともに収蔵されました。全42巻240冊(ノート230冊、手帖10冊)、ただし、生前に一部が散佚しています。

田中一松(1895-1983)は、山形県鶴岡市出身。アジア太平洋戦争中を含む半世紀以上、文化財保護行政の中核を担いました。全国の所蔵者を訪ね膨大な点数の絵画作品を実査。今回展示した「田中一松資料」(東京文化財研究所)は、少年期からのスケッチブック、東京帝国大学在籍当時のノートをはじめ、美術作品に関する調査記録ノート類など44冊や12000件余の調査書類、写真、会議資料など種類豊富で貴重な資料群であり、2008年、ご遺族および出光美術館より東京文化財研究所に寄贈されました。

土居次義(1906-91)は、大阪市出身。京都帝国大学で澤村専太郎より美術史の手ほどきを受けました。また、在野の美術史研究者土田杏村の影響を受けたこともわかっています。澤村による「日本美術史は若く未解決の問題が山積みである」という言葉で日本美術研究を志した土居の最大の課題は、数多く伝存する京滋の襖絵調査でした。文献調査に加え、岩の皴法(質感表現)など細部の比較にもついで画家を判別し、伝来の筆者の再検討をおこないました。京都国立博物館館長、京都工芸繊維大学教授を歴任しました。京都工芸繊維大学のOBの方々からは、土居先生に襖絵の見学につれて行ってもらったという声を

しばしば聞きます。今回展示する「土居次義調査研究資料」(京都工芸繊維大学附属図書館)は、1928年の京都帝国大学入学前後から書き続けられた調査研究ノート200余冊、5000枚以上の調査写真、蔵書の二部からなる資料で、調査研究ノートは、作品調査記録に加え、大学在籍当時の受講ノートや資料を筆写し製本したものも含まれます。

在野と官学というその立ち位置の違いは調査ノートに微妙に反映されていますし、画家志望でもあつた土居の絵の美しさはまた格別です。今回の展示で注目すべき点のひとつが文化財保護という視点です。関東大震災発生時、相見は48歳、田中は27歳。両者とも震災後の文化財調査に携わります。東京近郊のあらゆる美術品所蔵者が被災した状況で、相見は罹災美術品図録編纂事務を嘱託され、2年間で269ヶ所の名家や寺社、官公庁等を調査しました。ノートには確認した作品名に「持出し」「焼亡」といった語句が記されています。全貌は「罹災美術品目録」(1933年刊)に集成されており、その凡例には震災後の混乱が続くなか、関係者の記憶を頼りに調査を進めた様子が生々しく伝えられています。

また、田中は全国の文化財疎開に、土居は二条城障壁画など京都市内文化財の疎開にそれぞれ奔走しました。このような経験が、三人の記録することに対する強い意識に影響を与えたことは間違いないでしょう。美術作品を扱う美術研究は当然ですが、すべての研究において、その原点には「見る」ことがあります。先入見なく、謙虚に対象を観察することによつてはじめて、その外観だけではなく、本質までも見極めることができます。また、「記す」ことの重要性も言うまでもありません。

デジタルカメラやパソコンが当たり前の今日だからこそ、研究の原点とも言える「眼の記録」に立ち帰ることはすべての研究者にとって必要なことだと思えます。対象を前にしたときの研究者の研ぎ澄まされた感性を、ご覧ください。



図1
《土居次義先生調査ノート「公事留帳」部分》



図2
《繫馬図(絵馬)》
(海津天神社)
土居次義



図3
《土居次義先生調査ノート》